

The Weird Russian Mind-Control Research Behind a DHS (The Department of Homeland Security) Contract

合衆国国土安全保障省との契約に基づいた異様なロシアのマインド
コントロール研究

出典：WIRED NEWS 2007年9月20日

著者：Sharon Weinberger

モスクワにあるサイコテクノロジー（精神技術）研究所の土牢のような部屋は人体実験に使われている。その研究所はそのテクノロジーを以てすれば人の潜在意識を読み取り、行動を変える事が出来ると主張している。モスクワ-それは未来のアメリカとも言えるが、その反テロリズム技術は、モスクワの地下鉄終点近くに建っている、出入口が一つだけで窓が全くない、円形で土牢のような部屋の中にあるかもしれない。

ここサイコテクノロジー調査研究所では人体実験被験者は彼らの潜在意識を操る事を目的とした実験台にされることになる。研究所を運営しているエレナ・ルサルキーナという白髪の婦人が身振り手振りで話すには、その閉所恐怖症になりそうな室内の中央には歯科医の診療台のような椅子が、燦然と輝くコンピューターモニターの前に置かれている。

「被験者の多くは志願者です」と彼女は言った。分厚いコンクリートの壁が屋外にある大学のキャンパスの騒音を消していた。「我々は精神病施設と共に犯罪者を研究するプログラムをやり遂げました。その結果はどんな方法によっても作り変える事は出来ません。何の主観主義もありません。」

DHS はテロリストが攻撃する前に彼らを見つけ出すための方法を探して、今までに多くの未知なる場所に足を踏み入れたが、多分このロシア首都郊外の〈実験室ほどよそ者には出会えないだろう。〉

(〈) は文章が不完全なため正しい意味が分からない)

その研究所は長年人間行動学の未知の分野の研究-サイコエコロジーと言われ

ているが-の中心として役立って来たが、そのルーツは旧ソビエト時代のマインドコントロール研究にまでさかのぼる事が出来る。

DHS が注目したのはシマンテック スティミュリ リスポンズ メジャーメントテクノロジー (SSRM Tek.) と呼ばれる方式による研究だった。それは恐らく被験者の潜在意識に訴えるメッセージへの彼らの無意識の反応を分析する事が出来ると思われる「読心術」をもとにしたソフトウェアである。

SSRM Tek. は被験者に単なるコンピューターゲームとして提供されたが、それはオサマ・ビン・ラディンやワールドトレードセンターの映像のように、被験者の潜在意識に訴えるサブリミナルイメージがパッと光ってスクリーン (ディスプレイ) 上を横切るものだった。

その「ゲームプレイヤー」-例えば空港の出入国審査の列に並んだ一人の旅行者が、特には自分が見ているものに意識的に抵抗を覚えることなく、そのイメージに反応してボタンを押す。その理論によれば、テロリストはごちゃ混ぜになったイメージに無意識に反応するが、それはテロリストとは無縁な一般の人々とは異なるとある。

マインドリーダー2.0のソフトウェアを試す装置が、モスクワのサイコテクノロジーリサーチ研究所の壁に掛かっている。SSRM Tek. として北アメリカで売りに出されたが、その技術はDHSと契約した米企業により、間もなく空港の出入国審査に試用されるだろう。

「何ら問題のない結果であれば旅行者はそのまま通過出来ます。」とルサルキーナは去年取材者が尋ねた時に言った。「もしも何かあればその人物は追加された検査を通過しなければなりません。」

ルサルキーナはその技術をマインドリーダー2.0 と呼ばれるプログラムとして西側諸国に売り出している。SRSテクノロジーと呼ばれる、アメリカの防衛請負業者と仕事をしているカナダの合資会社とルサルキーナは協力して西側諸国に売り出している。この5月にDHSは政府後援のSSRM Tek. テストをする計画を発表した。

その契約はサイコテクノロジーリサーチ研究所とその先導者たちにとってささやかな勝利であった。彼らは長年西側諸国に受け入れてもらうべく闘って来た

人たちである。それは計算者のためにどう調査するか図解もしている。テロリズムテクノロジーによりアメリカ政府をしきたりに捕らわれない（そして信用出来ないと言う人もいるかもしれないが）科学へと導いて行った。

その研究所での全てのテクノロジーはルサルキーナの亡き夫であるイゴールスミルノフの労力に基づいている。彼は物議をかもしたロシアの科学者で、彼のマインドコントロールの話は、彼が亡くなる前の今から数年前に度々報道陣の注目を集めた。

スミルノフはラスプーチンに似た性格で、ほとんど神秘的な説得力のパワーの持ち主としてマスコミから描写されていた。今日その研究所を初めて訪ねる人は、ピープルフレンドシップユニバーシティオブロシアにある鈍い灰色の建物に收容されて、「精神工学兵器の父」と呼ばれるスミルノフに捧げられた30分間のテレビ番組を見るように頼まれる。それはロシア語の専門用語で一般にはマインドコントロール兵器である。

ビデオでは髭をはやして自信に満ちているスミルノフは、いかにサブリミナルサウンドが人の行動を変える事が出来るかを説いている。訓練されていない耳にそのデモテープは豚のキーキーという悲鳴のように聞こえる。

エレナルサルキーナはテロリストを篩にかける道具の実演をしている。彼女はそれがポリグラフ（嘘発見器）より早く見抜くので、空港で役立つと言った。

ルサルキーナによれば、ソビエト連邦の1980年代のアフガニスタンとの血の戦争中、ソビエト陸軍はスミルノフのサイコテクノロジーを支持した。それはムジャヒディーンと戦うために使われたが、同時にロシア兵士の外傷性ストレス症候群を治療するためにも使われたと彼女は言った。

アメリカではマインドコントロールの話をする、一般にはアルミ箔の帽子を連想させる。しかし精神工学兵器のアイデアはロシアでは比較的好評である。

1990年代後期、当時のロシアの議会 Duma のメンバーだったウラディミールロパティンはマインドコントロール兵器を制限することを推し進めた。ロシアでは動きが深刻に受け止められたが、西側の報道陣には好奇心をそそられる記載も見られた。モスクワでのあるインタビューで、すでに Duma を去っていたロパティンは、スミルノフの研究がそのような兵器が実在していることの証明になる

と言及した。「それは医学界だけでなく個人や犯罪グループからも資金提供を受けて使用されている」とロパティンは言った。テロリストすらもその兵器を手に入れているかもしれないと彼は付け加えた。

ソビエト連邦崩壊後スミルノフは軍事研究から手を引き、精神病患者や薬物常用者を治療を始めて、大学に店も開店した。研究所の研究の大半はサイココレクションと呼ぶ研究に集中した。サイココレクションはサブリミナルメッセージを使って被験者の意思をねじ曲げて、本人に知らせずに人格（性格）を変えもした。

スミルノフのテクノロジーはKGB（旧ソ国家保安委員会）のもと、1991年にゆっくりとアメリカに移動し始めた。KGBはモスクワのスポンサー付きのカンファレンスで、かつてはソビエトの秘密技術を世界に売り出そうとしたことがある。スミルノフのマインドコントロールの主張はクリス&ジャネット・モリスの興味をそそった。二人はかつてサイエンスフィクションライターだったが、後にペンタゴンのコンサルタントに転身した。二人は今やペンタゴンの「非殺傷」兵器の概念を打ち立てた人として世界的に信望がある。

去年のインタビューでクリスモリスはスミルノフに少なからず興味をそそられていたので、彼に同行して研究所に行き、スミルノフに自分の頭に脳波表（EEG）に繋がっているワイヤーを巻き付けさせた。通常は科学者が脳の状態を査定するために使われるが、スミルノフはモリスのEEGの記録をじっと見詰めたが、やがて彼の潜在意識の秘密を即座に見抜いて、モリスが彼自身の名前を嫌っているというように、詳細を暗に知らせた。

そのテクノロジーの根底を成す根拠はテロリストたちがこの様にごちゃ混ぜになったテロリストのイメージをそれと気付くことすらなく見分けて、映像に対する彼らの潜在意識の反応により思いがけず本心を表すことになるだろう。

『おやまあ！故郷に帰った男たちは前にこれを見たことがある』と私は言った」とモリスは思い出した。モリス兄弟（姉妹）は2、3の軍事代理店の商品を見て回ったが、自らお金を支払ってでも手にいれたいものはなかった。

しかしその一方で1993年にアメリカで短期間だったが名声を上げた。それはFBIがワコーで膠着状態にあるカルトリーダーのディビッドコレッシュとの関係を終わらせたいとの意向からスミルノフに相談した時であった。スミルノフはコ

レッシュに降伏するよう説得するためにごちゃ混ぜ音-またもやあの豚がキーキーと甲高い声をあげるような-を拡声器を使った爆音で流したらどうかと提案した。しかしFBIはスミルノフの横柄な回答を見合わせた。関係者がもしもサブリミナル信号がうまく作動しなかったらどうなるのかと聞いた時に、コレッシュの信者らがお互いに喉を切り合うかもしれませんとスミルノフが答えた。モリスは詳述した。FBIはスミルノフの提案の採用を見合わせたので、スミルノフはマインドコントロール技術と共にモスクワに帰った。「スミルノフについてFBIはイエスもノーも求めなかった。その結果私たちのメソッドは残念ながら使われなかった」とルサルキーナは、ドラッグを紙巻き煙草に載せながら言った。

イゴールスミルノフ、サイコテクノロジーリサーチ研究所の創設者は2005年に心臓発作で亡くなった。スミルノフはアメリカでは1993年のワコー包囲攻撃の間のFBIの相談役だったためによく知られている。スミルノフは2004（先には2005となっている）の11月にルサルキーナをひとり残して他界した。ルサルキーナは長年に亘っての、彼の研究所を運営する上での協力者だった。スミルノフの何枚もの肖像写真がルサルキーナのデスク上を覆っている。

彼のかつてのオフィスは聖堂のようだ。その壁には彼がかつて秘密にしていた特許品やソビエト政府からの表彰状やKGBの暗号部署から贈られたカレンダーが並んでいた。スミルノフは亡くなったが、ルサルキーナは精神工学の武器による「武装競争」を予測している。それは核兵器より遥かに危険なものだと彼女は断言している。

彼女はその例として、「死体」に関する多くのロシアのニュース報道を、人々にはそれと知らせずにマインドコントロール兵器によってその記憶を消し去っているとされていると指摘した。

2003年モスクワ劇場包囲攻撃でチェチェン過激派により捕られていた何百人もの人質が中にいたが、その間ロシアの特別警察が研究所に接触していたとも彼女は主張した。「私たちはコンサートホールの事態を落ち着かせる事が出来たかもしれませんが。そしてテロリストたちが全ておしまいだと叫んでいたかもしれませんが」と彼女は言った。「そして必然的に全ての犠牲が回避されたかも知れませんし、テロリストたちを裁判にかける事も出来たかもしれませんが。しかしアルファグループ-ロシアではデルタフォースに相当する-が以前既にテスト済みの旧式のやり方で行くと決定しました。」ロシア当局は攻撃者らとその捕虜たち

を制圧するために麻酔ガス（催眠ガス）を使った。結果人質の多くを窒息死させることになった。

「最近は」とルサルキーナは説明した、「研究所はそのサイコテクノロジーをアルコール依存性患者や薬物中毒患者の治療に使っていますと説明した。インタビューの間何人かの患者-病気で痩せ細った様に見えた若い男性たちが廊下で待っていた。しかしアメリカの対テロ戦争と、国土保全調査のために蓄えられていた何百万ドルにより、スミルノフに西側諸国での尊敬すべき故人となるチャンスを与えた。

スミルノフのテクノロジーは、サイコテクノロジーリサーチ研究所に物品を卸している北米の業者として役立っている、カナダの会社のノーザンサイコテクノロジーを介して、アメリカ政府のレーダースクリーンに再び登場した。約三年前、ノーザンサイコテクノロジーはDHSのマーケットに強引に割り込む手助けになるアメリカのパートナーを探し始めた。革新的なテクノロジーを持っていると自ら主張する会社にとって、この数年間は豊富な好機をもたらして来た。

2007年の会計年度にDHSは、科学技術のためとして9億7千300万ドルを計上した。そして最近になって、悪意ある人たちを見抜くテクノロジーを開発する目的で計画されたプロジェクトホスタイルインテント（敵意ある意図-テロ予備軍-対策プロジェクト）を発表した。

あるカリフォルニアの防御を請け負う、ダウンレンジG2ソリューションズはSSRM Tek.に関心があると表明したが、ノーザンサイコテクノロジーズが検査に使えるソフトウェアを作ることを辞退したので、疑い深くなった。「それで即座に我々の疑念が沸き上がった」とダウンレンジのCEOで社長のスコットコンはワイア（有線）ニュースで話した。「我々は十分な労苦もなく我々の名声を通信網路上に出す用意はない。」（記者が去年尋ねた時にルサルキーナもまた、当日機能しないと行って、ソフトウェアを実演するのを辞退した。）しかし一方でコンはテスト不足が彼を悩ませると言った。彼がノーザンサイコテクノロジーズを見出だして、今やマンテックインターナショナルコープの一部になったSRSまで行ったが、関わり合いは終わった。

セミヨンイオフ、ノーザンサイコテクノロジーズのトップは自身を「脳科学者」と認識しているが、電話でのインタビューは断っているが、e-mailでの質問には答えていた。イオフはコンとの非公開合意にサインしたと言った。少し

ばかりの協議をした後彼は別の任務をするために姿を消したが、DHSの声明後に再び現れた。自然科学に関してはイオフは博士号を持っている。そしてスミルノフのロシア語による出版物がSSRM Tek.の基本原理であると言及した。

しかしながら、有名な非殺傷兵器の専門家であるジョンアレキサンダーを含むが、かならずしも誰もがスミルノフのテクノロジーに感銘を受けたわけではない。アレキサンダーは、ワコーの重大局面中のワシントンでのスミルノフの会談について様子をよく知っているが、去年のあるインタビューで、今になって思えばそこには重大な疑念があったと言った。「それはワコー問題の山場で彼らは藁をもつかむ状況だった」と彼はFBIの束の間の関心について言った。「そこにいた人々から私が理解したのは、それが大して効を奏していなかったという事だった」

ゲオフショエンバウムはマリイランド薬科大学の神経科学者だが、SSMR Tek.で説明されているテクノロジーを明確に実証するいかなる科学的研究にも、私は気付いていないと言った。「言うまでもなく、あなたの頭脳はあなたの頭脳以下のもので把握することができ、意識して表現したり、識別する事が出来る。」とショエンバウムは言った。例えばディスプレイに画像を100分の1秒間見せる—それは余りにも短いため人々が意識的には気付かない—が誰かの気分に影響を与えているかもしれないという研究に注目していた。そうした事が理にかなっているし、その裏には経験に基づいた有益な証拠がある。「問題は」と彼は言った。「影響行動は別として、彼の知っているどんな科学も、テロリストを見付け出せる選択性または検出感度を生み出せないし、我々は未だにどうやってラットがライトから食べ物を予測することを学習するかのレベルの研究をしているのです」と彼は言った。「それが現代神経科学の水準である」

神経科学の進歩は直ぐ側まで来ているのが彼には分かると言った。「もしも彼らが話していることが我々に出来れば、あなたはそのことについて知るだろう」とショエンバウムは言った。「それは地下室にいる一握りのロシア人たちではないだろう」

その間、DHSの契約書はその関係者のせいで依然切迫していたが、全ての団体が詳細や裁定の規模についてコメントするのを拒んでいたけれども、ルサルキーナは最近のe-mailに返信しなかったが、去年のインタビューでは、研究所がアメリカの空港のスクリーニングにそのテクノロジーを売り出すつもりだと正式に発表した。

ラリーオリオスキー、DHSのスポークスマンだが、契約書の公表に関するコメントを拒んだ。「まだ規定は付与されていない」とe-mailで返事をした。「DHSとの未決定の契約書についてどんな些細な事も議論するには時期尚早だろう。そしてひとたび契約書が準備万端整ったなら私は喜んでインタビューに応じましょう。」とノーザムサイコテクノロジーのイオフはe-mailに書いた。

マークルート、マンテックのスポークスマンは、「あの方々はお得意様ですから」という註釈を加えて、DHSへの質問を延期した。